The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	わが子の熱性けいれんを体験した親の気持ちと対応
Author(s)	小谷, 牧子; 隅, 陽子; 中井, 祥子 他
Citation	大阪大学看護学雑誌. 2005, 11(1), p. 18-23
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56827
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

－研究報告－

わが子の熱性けいれんを体験した親の気持ちと対応

小谷牧子*・隅陽子**・中井祥子***・湯村佳奈子****・東根華子*****
行政美佳*****・三木梨沙*****・野村幸子******・藤原千惠子*******

FEELINGS AND THOUGHTS OF PARENTS WITH INFANTS OF FEBRILE CONVULSION

Kotani M, Sumi Y, Nakai S, Yumura K, Higashine H,
Yukimasa M, Miki R, Nomura S, Fujiwara C.

要　旨

本研究の目的は、2002年7月から2003年8月に、大阪府下の4ヶ所の病院および2ヶ所の保育園で乳幼児のわが子の熱性けいれんを体験した親27名と、大阪府下の2ヶ所および広島県下の1ヶ所の市で実施されている3歳半と1歳半の健康診査の会場で行ったけいれんに関する調査の回答者のうち乳幼児のわが子の熱性けいれんを体験した親24名の計51名を分析対象とし、回答者の属性による体験内容の差異を分析することである。

親が記憶している症状は「眼球の変化」が70％と最も多かった。けいれん体験時の気持ちは「早く治まってほしい」「時間が長く感じた」など不安な気持ちと、「自分が落ち着かないといけない」と自分に言い聞かせる気持ちがあり、複雑な親の心境が読み取れた。対応では「救急車を呼んだ」が60%以上を占めていた。またけいれん時の対応としての「口に物をくわえさせた」では事前にけいれんについての情報の有無で有意差がみとめられた。けいれんを2回以上体験した親が初めての親と比べて「体を横たえて観察した」など冷静な対応をしていた。熱性けいれん体験後の親子の日常生活の変化では、「外で遊ばせる機会が減った」など子どもの行動を制限する一方、初めて体験した親の場合は特に健康への気づきの体験になっていることが示された。

キーワード：熱性けいれん、両親、乳幼児
Keywords：Febrile convulsion, parent, infant

*大阪大学医学部附属病院 **大阪府済生会吹田病院 ***大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻 博士前期課程 ****兵庫県立こども病院 *****神戸市立中央市民病院 ******広島県立保健福祉大学 *******大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻

Ⅰ．緒言

熱性けいれんは乳幼児には比較的よく見られる病態で、38℃以上の発熱に伴うけいれん発作であり、おさまった後、多くは神経学的な異常を残さない。熱性けいれんは、生後3ヵ月から3歳までに圧倒的に多く，6、7歳になっても起こす場合がある。わが国の最近の調査では発生頻度は、8～10％であると言われ[1]、また3、4歳では6～8％とも言われている[2]。

医療者にとって、熱性けいれんは重篤な病態ではないという認識がある。一方，親にとって熱性けいれんは非常に重篤な印象があり，大きな隔たりがあると考えられる[3]。三宅[4]は、熱性けいれんに初めて接した場合に親の半数が死の恐怖を感じていたと報告している。小谷・隅[5]はわが子のけいれんを体験した親を対象に面接調査によって、親はまさか自分の子どもがなるとは思っておらず、発作時の目や四肢の変化などの症状に衝撃を受け、死の恐怖や再発の不安を抱くことを指摘している。適切な診療を可能にするためには医療者と患者、家族との信頼関係は重要である。熱性けいれんに直面したときの親の気持ち、対処行動、医療者に対する気持ちなどを明らかにすることによって、医療者の対応を考えていく必要があると考えられる。

わが子の熱性けいれんを体験した親を対象とした研究では、親の様々な恐れと悩みや不安および不安を取り除くような具体的な説明の必要性[4]、けいれんの原因・症状などの理論的説明の必要性[3]が指摘されている。

Ⅱ．研究目的

本研究の目的は、わが子の熱性けいれんに直面した親を対象に、体験した熱性けいれんの症状、そのときの親の気持ち、親の対処方法、その後の親子の日常生活の変化について、子どもと親の属性による差異を分析することである。

Ⅲ．研究方法

1．分析対象

分析対象は、病院と保育園においてわが子の熱性けいれんを体験した親27名および健康診査の会場で「発熱とけいれんに関する調査」の回答者177名（回収率42.5%）のうち、わが子の熱性けいれんを体験した親24名の計51名とした。

対象の選択においては、子どもの熱性けいれんがてんかんへの移行した例、熱性けいれん発症前に著明な発達遅滞や運動障害および基礎疾患を有する例をあらかじめ除外した。

2．調査期間

調査は、2002年7月から2003年8月に行った。

3．手続き

①大阪府下の4ヵ所の病院と2ヵ所の保育園において、わが子の熱性けいれんを体験した親に調査票を配付し、調査への協力を依頼した。回収は病院の場合には回答者が記入後郵送する方法、保育園の場合には記入後封筒に入れて回収BOXに入れる方法で行った。

②大阪府下の2ヵ所および広島県下の1ヵ所の市で実施されている3歳半と1歳半の健康診査の会場において、調査への協力を依頼し、調査票を配付した。回収は回答者が記入後郵送する方法で行った。

4．調査内容

1）回答者の属性

①回答者の年齢②けいれん時の子どもの年齢群③子どもの熱性けいれんを体験した時期④今回のけいれんが初回かどうか⑤熱性けいれんに関する情報の有無

2）熱性けいれん時に記憶していた症状

熱性けいれんの症状は、回答者が記憶している症状を自由に記載する方法で求めた。

3）けいれん体験時の親の気持ち

親の気持ちの項目は、文献[4、5]や研究者の小児看護経験を参考に、親が感じやすいと思われる気持ちについての14項目を作成した。それぞれの項目を「そのとおり(4点)」、「やや(3点)」、「あまり(2点)」、「まったく(1点)」の4段階で回答を求め、点数化した。

4）けいれん時の対応

けいれん時の親の対応は文献[3、4]や研究者の小児看護経験を参考に、親がとりやすい対応10項目を作成し、対応の有無を「はい」、「いいえ」で求めた。

5）けいれん体験後の日常生活での変化

わが子の熱性けいれん後の生活で変化した内容は、文献[5]および研究者の小児看護経験を参考に10項目作成し、当てはまる項目を選択してもらった。

5．分析方法

統計分析はSPSSver11.5Jを用いて行った。初回の有無と熱性けいれんの情報の有無に関しては、わが子の熱性けいれん時に親が記憶していた症状・親の対応・けいれん体験後の日常生活での変化の差異をχ^2検定、親の気持ちの差異はt検定を行った。子どもの年齢群とけいれん経験の時期に関しては、けいれん時の症状・対応・変化の差異をχ^2検定、親の気持ちの差異は一元配置分散分析を行った。

自由記載においては内容分析法を用いた。それは、ひと

つの意味内容を1項目として取り出し内容の共通性によってカテゴリーに分類する方法である。カテゴリー分類においては、小児看護の研究者1名、小児看護の経験のある看護師1名によって、個別に分類し分類内容の一致度を確認した。

6. 倫理的配慮

調査に際しては、①研究の趣旨②調査の参加は自由意志であること③無記名であり個人が特定されないこと④調査結果は研究目的のみに使用することを調査票に明記した。

回収においては、情報が漏れないように封筒に入れて回収するように配慮した。調査票の処分は、研究終了後シュレッターを用いて確実に行うようにした。

Ⅳ. 結果

1. 回答者の属性

回答者は母親48名(94.1%)、父親3名(5.9%)で、親の年齢は平均32.8歳(SD3.8)であった。

熱性けいれん発症時の子どもの年齢群は、幼児前期34名(66.6%)、幼児後期以上11名(21.6%)、乳児6名(11.8%)であった。親の熱性けいれんを体験した時期は、3年以上前21名(41.3%)、1年未満の時期17名(33.3%)、1年から3年未満の時期9名(17.6%)、無回答4名(7.8%)であった。けいれんの体験は、初めて37名(72.5%)、2回以上14名(27.5%)であった。熱性けいれんについての情報の有無は、情報あり40名(78.4%)、情報なし11名(21.6%)であった。

2. 熱性けいれん時の体験内容

1）熱性けいれん時に親が記憶していた症状

親が記憶していた症状は、表1のように「眼球の変化」が最も多く、「ふるえ」「硬直」「意識消失」「高熱」「チアノーゼ」の順になっていた。

表1　記憶していたけいれん症状

(n=51)

症状	あり	%
眼球の変化	36	70.6
ふるえ	23	45.1
硬直	23	45.1
意識消失	19	37.3
高熱	19	37.3
チアノーゼ	18	35.3
口周囲の変化	15	29.4
ぐったり	14	27.5
振戦	13	25.5
発声	7	13.7
呼吸停止	5	9.8
嘔気・嘔吐	4	7.8

2）けいれん体験時の親の気持ち

親の気持ちは、図1のように「早く治まってほしい」が最も多く、「時間が長く感じた」「息をしなかったらどうしよう」「何度も繰り返すのか」の順になっていた

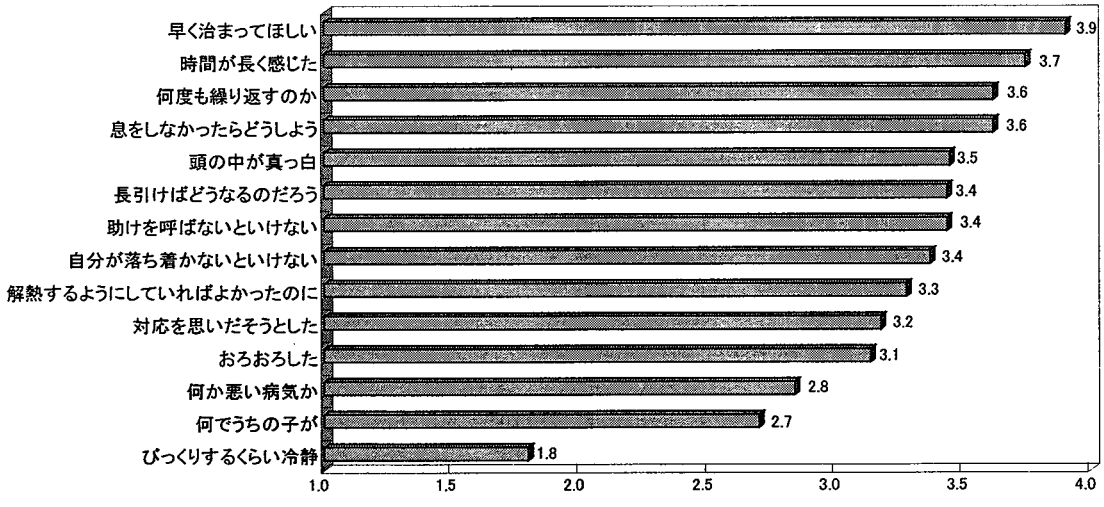

図1　親の気持ち　(n=51)

親の気持ちの各項目の相関関係は、図2のように示された。「息をしなかったらどうしよう」は、「時間が長く感じた」「おろおろした」「助けを呼ばないといけない」「早く治まってほしい」と正の相関があり、「自分が落ち着かないといけない」と負の相関があった。「びっくりするくらい冷静」は、「おろおろした」「時間が長く感じた」「助けを呼ばないといけない」と負の相関があった。

3）けいれん時の親の対応

親の対応は、表2のように「救急車を呼んだ」が最も多く、「顔を横に向けた」「大声で呼びかけた」の順になっていたが、「口に物をくわえさせた」「音を消して静かにした」「暗くした」は少なかった。

4）けいれん体験後の日常生活での変化

けいれん体験後の日常生活での変化は表3のように、「外で遊ばせる機会が減った」「他人に預けるのが少なくなった」「子どもの栄養に気をつける」の順になっており、「すぐ体温を測る」は少なかった。

表2　親の対応

(n=51)

対応の内容	はい	%	いいえ	%
救急車を呼んだ	31	60.8	20	39.2
顔を横にむけた	22	43.1	29	56.9
大声で呼びかけた	21	41.2	30	58.8
体を横たえ観察した	16	31.4	35	68.6
治まるのを見守っていただけ	15	29.4	36	70.6
衣服を緩めた	14	27.5	37	72.5
家人を呼んだ	11	21.6	40	78.4
口に物をくわえさせた	6	11.8	45	88.2
音を消して静かにした	4	7.8	47	92.2
暗くした	3	5.9	48	94.1

表3　けいれん後の日常生活の変化

(n=51)

変化の内容	あり	%
外で遊ばせる機会が減った	47	92.2
子どもの栄養に気をつける	46	90.2
他人に預けるのが少なくなった	46	90.2
風邪をひかないように気をつける	30	58.8
座薬を早めに使うようになった	28	54.9
関連記事への関心が増えた	28	54.9
すぐ医者に行くようになった	24	47.1
すぐ体温を測る	7	13.7

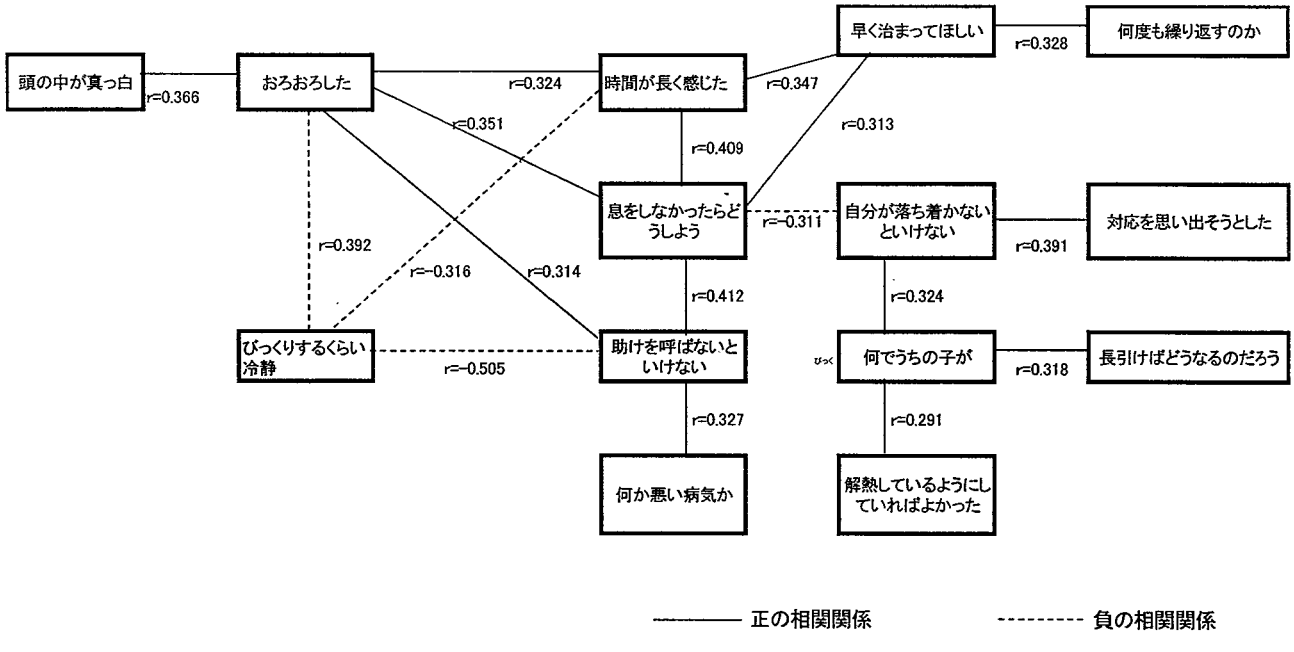

図2　親の気持ちの項目間の相関関係　（有意差のある項目のみ）

3. 対象の属性による熱性けいれん時の体験内容の差異

1)熱性けいれん時に親が記憶していた症状における差異

症状では、「振戦」のみが初回37名中6名(16.2%)、2回以上14名中7名(50.0%)で有意差があった(χ^2=5.82、p=0.03)。他の症状は対象の属性による差異はなかった。

2) けいれん体験時の親の気持ちにおける差異

わが子の熱性けいれんが初回かどうかでは、「対応を思い出そうとした」のみが初回2.9(SD1.3)、2回以上3.9(SD0.9)で有意差があり、初回の親が2回以上よりも得点が低かった(t=−2.52、p=0.02)。情報の有無では、「時間が長く感じた」が情報あり3.7(SD0.6)、情報なし4.0(SD0.0)、「息をしなかったらどうしよう」が情報あり3.5(SD0.7)、情報なし3.9(SD0.3)で有意差がみられ、情報なしの得点が高くなっていた(t=−1.87、p=0.00、t=−2.55、p=0.02)。また「対応を思い出そうとした」が情報あり3.4(SD1.1)、情報なし2.3(SD1.4)で、情報ありの得点が高くなっていた(t=2.93、p=0.01)。

子どもの年齢群やけいれんの体験時期では、親の気持ちのすべての項目において得点に有意差がみられなかった。

3) けいれん時の親の対応における差異

初回かどうかでは、「体を横たえ観察した」が初回37名中8名(21.6%)、2回以上14名中8名(57.1%)で有意差があり(χ^2=5.95、p=0.02)、「治まるのを見守っていただけ」が初回37名中7名(18.9%)、2回以上14名中8名(57.1%)で有意差がみられた(χ^2=7.15、p=0.01)。この2項目は2回以上経験した者の方の割合が多くなっていた。熱性けいれんに関する情報の有無では、「口に物をくわえさせた」において情報あり40名中2名(5.0%)、情報なし11名中4名(36.4%)で、有意差があり(Fisherの直接法、p=0.02)、情報なしの方の割合が多くなっていた。けいれん時の子どもの年齢群とけいれん体験時期では有意差はみられなかった。

4) けいれん体験後の日常生活での変化における差異

初回かどうかでは、「熱性けいれんの関連記事への関心が増えた」において初回36名中24名(66.7%)、2回以上14名中4名(21.6%)で有意差があり、初回の親の方が割合が高くなっていた(Fisherの直接法、p=0.03)。他の対象の属性による差異はみられなかった。

V. 考察

けいれん時に記憶している症状は、自由に記載してもらう方法で求め、しかもけいれんを体験してから3年以上が半数弱含まれているにもかかわらず、詳細に記載されている回答が多かった。特に「眼球の変化」が多くを占め、親にとって印象の強い症状であると考えられる。そのほかに、けいれん時に記憶していた症状は、「ふるえ」「硬直」「意識消失」などが多くあげられている。これらは熱性けいれんの一般的な症状にあてはまる。こうした視覚に入ってくる顔貌や全身に起こる症状は、印象深くいつまでも記憶に残ることから、わが子のけいれん体験は親にとって非常に大きな衝撃をおこす体験であると考えられる。

けいれんが起こった時、「早く治まってほしい」「時間が長く感じた」と回答した親が多く、それらは正の相関が見られた。けいれん時間は普通1分から5分以内と言われているが、「早く治まってほしい」と思うほど親にとってその時間が非常に長く感じていることが示されている。特にけいれんに関する情報がない場合は時間を長く感じてしまう傾向がある。それは、「息をしなかったらどうしよう」や「何度も繰り返すのか」という状態の悪化に対する恐れや「何か悪い病気か」のような原因に対する不安、けいれんの苦痛に苦しむわが子への不憫さを多く感じているからと思われる。三宅[4]も同様の親の気持ちを報告している。しかし、一方で、けいれん症状に苦しむわが子を目の前にして、「自分が落ち着かないといけない」や「対応を思い出そうとした」と慌てる自分に言い聞かせることや適切な対応をはかろうとするような気持ちも生じており、親の複雑な心境が読み取れる。

けいれん時の対応では、「救急車を呼んだ」が半数以上を占めており、村上[3]の報告と同様の結果であった。これは、初回と2回以上経験している場合による差がなく、「誰か助けを呼ばないといけない」という親の心細さとわが子を助けたいという思いを反映していると思われる。しかし多賀ら[6]の研究では、「救急車を呼んだ」という親が少なく、地域による差があると報告している。本研究では大阪府、広島県と異なる地域で調査しているが、対象数が少ないために地域差までは分析できなかった。そのほかには、「顔を横に向けた」や「体を横たえ観察した」のような適切な対応がされているが、「大声で呼びかけた」や「口に物をくわえさせた」のような不適切な対応もなされている。特に「口に物をくわえさせた」は、けいれんに関する情報が事前にあったかどうかで差があり、けいれんに対する適切な情報提供の徹底が重要であることが示唆されている。相澤ら[7]や村上[3]は2回以上繰り返した親が予後に関する不安が大きかったと報告している。複数回繰り返す場合は、予後に対する説明や不安に対する対応を図るこ

とが重要であると考えられる。

けいれんを体験した後の日常生活での変化は、「外で遊ばせる機会が減った」や「他人に預けるのが少なくなった」が多く、親の不安が子どもの行動を制限するような結果をもたらしている。しかし、一方で、けいれん体験は、親に対して、子どもの栄養や風邪の予防、関連記事への関心が高まるなど、子どもの健康管理や健康知識に関する関心度を高めるのに有効に作用している。このことから、三宅[4]や村上[3]も指摘しているように医療従事者は、けいれんで受診した親に対して正しい知識や対応を十分に浸透させることによって、過剰な行動制限を少なくし、不安や恐怖の軽減を図り、健康への関心を高めるように働きかけることが重要であると思われる。

Ⅵ. まとめ

本研究は、2002年7月から2003年8月の時期に調査を実施した。分析対象は、大阪府下の4箇所の病院、2箇所の保育園での熱性けいれんを体験した親27名、また大阪府下の2箇所の保健センターおよび、広島県下の1箇所の保健センターで実施された3歳半健診と1歳半健診においてけいれんに関する調査の回答者のうち熱性けいれんを体験した親24名の計51名であった。回答者の属性によるけいれん体験内容の差異を分析した結果から、次のような結論が得られた。

①親が記憶していたけいれん症状は「眼球の変化」が多く、けいれんを体験してから3年以上が半数弱含まれているにもかかわらず、視覚に入ってくる顔貌や全身症状が印象深く記憶に残っていることから親にとって大きな衝撃を起こす体験であったと考えられる。また、初回かどうかでは、「振戦」のみに有意差があった。

②親の気持ちでは「早く治まってほしい」「時間が長く感じた」が多く、特に「時間が長く感じた」ではけいれんの情報がない方の得点が高くなっていた。これは、子どもに苦痛からの解放を願う気持ちと状態の悪化に対する恐れや原因に対する不安が大きく、また慌てる自分を落ち着かせる気持ちが生じている。

③親の対応では「救急車を呼んだ」が多く、自分以外に人の助けを借りてわが子を救いたいという必死の気持ちを反映している。

④けいれんを2回以上体験している親は、「体を横たえて観察した」や「治まるのを見守っただけ」を多くしており、冷静に対応していることが示されている。

⑤けいれんに関する情報がない親が「口に物をくわえさせた」などの不適切な対応をしていたことから、親に対する情報提供の徹底が必要であると考えられる。

⑥けいれんを体験した後の日常生活では、子どもの行動制限をする一方で、特に初めてけいれんを体験した親は健康への関心が高まる機会になっている。

以上のことから、医療従事者は受診の機会に親の精神面の配慮とともに、正しい知識と対応の浸透に努める必要性が示唆されている。

謝辞

今回調査に参加くださいましたご両親に、厚く御礼申し上げます。また研究にご協力くださいました大阪府下の病院、保健センター、保育園、広島県下の保健センターの方々に深く感謝いたします。

引用文献

1) 前田弘子：熱性けいれんにおける疫学調査、小児科診療、2001、64 (3). 295－301
2) 大澤真木子、原美智子：熱性けいれん、阿部敏明、飯沼一宇、吉岡博編、小児科学・新生児学テキスト、東京都、診断と治療社、1999、647
3) 村上貴孝：熱性けいれんと親の認識、小児科診療、2001、64 (3)、384-388
4) 三宅捷太：熱性けいれんと親の気持ち、小児内科、1992、24 (1)、113-117
5) 小谷牧子・隅陽子：わが子の熱性けいれんを体験した親の気持ちと対処行動、大阪大学医学部保健学科看護学専攻母性・小児看護学講座、平成14年度卒業研究、2002
6) 多賀俊明、面家健太郎、吉岡誠一郎、他：いわゆる“熱性けいれん”を主訴に外来を受診した症例の検討、小児科診療、2002、55 (8)、1583－1586
7) 相澤加奈、金内めぐみ、金丸里佳、他：熱性けいれんの児を持つ家族の意識調査、2003、小児看護、38-40